

「ぶんぶんひろば」における授業の実践
「セミナーⅠ」
(赤ちゃんふれあい体験)
(保育学科)

保育学科は目的学科であり、ほとんどの学生は保育士証と幼稚園教諭2種免許状の取得を目指している。2年間で2つの資格を取得しようとする、連日90分授業が4～5コマあり、その多くが保育に関する講義や演習科目という状態となる。入学後、学生たちは授業数の多さに直面し、「こんなに大変な学科だったのか」と感想をもちすることもある。しかも、1年前期は、実習に関する科目も実習への準備が中心となり、11月の教育実習まで子どもたちと接する機会がない。

そこで、平成29年度より、セミナーⅠ（1年前期・水曜日・3コマ目）の中で、赤ちゃんに触れ合う体験を取り入れる計画を立てた。時期は、4月末のオリエンテーションを終え、児童文化鑑賞と運動会を体験した後の6月である。この時期は、大学生活への慣れと2か月間の疲れが出る時期と重なり、自身の進路への適・不適を口にする学生が出ることもある。この時期に赤ちゃんに出会うことにより、「保育者になる」という動機づけを高めることができるのではないかと考えた。

方法についての説明

・学生の活動単位（班）の分け方について

現在、講義科目では1学年を2つに、演習科目では3つに分けている。6人のチューターが6つのセミナーを担当している。1セミナーは平均16～17名であり、さらに、2つずつをグループ1（以下G1）、グループ2（G2）、グループ3（G3）と表現し、生活発表会や大学祭などで、まとまって活動するグループとしている。赤ちゃんふれあい体験はG1、G2、G3で行った。したがって、1グループの人数は32名程度である。

(注) この報告は、2018年度 大学・短大FD研修会用にまとめたものを参考にしている。

・2018年度の実施日時と人数を次に示す。

グループ1：2018年6月13日 32名

グループ2：2018年6月20日 32名

グループ3：2018年6月27日 32名

1グループを6つに分けて1つの班とした。

・事前学習について

ふれあい体験を実施するにあたり、事前学習が必要となる。学生たちの赤ちゃん体験には個人差があり、多くの学生は入学前の職場体験やインターンシップ以外に赤ちゃんに触れ合う体験を持っていない。1年前期には、「保育の心理学（内容は発達心理学）」や「子どもの保健」、「子どもの食と栄養」などの科目があるが、赤ちゃんに関する実際の知識がまだまだ豊富とは言えない。そこで、各セミナーに3冊ずつ「いっさいはん」という絵本（図1参照）を備え、事前に赤ちゃん（1歳半を中心に）のことを学ぶ機会を持った。その時に当日の質問内容や観察の観点を話し合った。



さく・え みんち
出版社：岩崎書店
(2016)

図1 事前学習用の絵本

・活動の内容について

事前に「ぶんぶんひろば」の参加者に、授業への協力を依頼し、1歳前後の赤ちゃんとその保護者の参加者を募った。多くの場合、保護者達は非常に協力的で、1回6家族の参加者は比較的容易に決まった。ただ、赤ちゃんは、当日体調が悪くなることも多く通常1～2家族多く募集した。1グループの学生を6班に分け、各班の質問時間を8分として、ぶんぶんひろばスタッフが交代を告げ、学生たちは順次、次の家族へと移動する。残りの時間は自由に「質問」や「赤ちゃんに関わる時間」とし、抱っこ練習をさせてもらう、赤ちゃんの遊びを観察する、一緒に遊ぶなどの時間とした。



写真1 1つの班の質問風景



写真2 ハイハイに感動



写真3 子どもと一緒にカード遊び

表1 学生のコメント

コメントの内容	件数
癒された	10
赤ちゃんの反応からたくさんのが学べた	8
赤ちゃんはかわいい、関わって嬉しい	7
貴重な体験。もっと回数と時間がほしい	6
保育者の自覚が高まった	5
保護者さんの苦勞や子どもへの思いを理解した	4
参加して下さった家族へ感謝	2
他の子どもへも関わってみたい意欲が湧いた	1
出産のことなどへの興味が湧いた	1
合計	44

結果

・学生のコメント（Tセミナー16名の集計）

16名の学生の44コメントを表1に示す。場面を記録した写真からもわかるように、学生たちは生き生きと嬉しそうな表情をしている。表情から、感動を味わったことが伝わってくる。昨年も今年も、何度も体験したいという要望があった。

・参加家族（保護者）のコメント

自分の子育てが学生さんの役に立つことが嬉しい。また参加したい。学内で挨拶されて嬉しい。

今後の課題

学生たちのコメントから、所期の目的は一応達成したと考えられる。しかし、「嬉しい」などの感情レベルにとどまらず、この体験を学生たちが「主体的・対話的で深い学び」として活かしていくために、今後の展開を考える必要がある。

1つ目は「リフレクション(振り返り)」である。今回の映像記録は「写真」であったが、佐伯ら(2018)は「動画」で記録して学生たちに見せると「学生は自分の姿に夢中になる」と述べている¹⁾。それは授業のグループワークで討議している学生の映像を見せたものであったが、自分の表情や発言の多寡に気づいたそうである。リフレクションにはいくつかの方法があり、その時間の確保の問題はあるが、まず、自分の行動を観察する、次に他者と関わる自分を観察、他者を個別に観察、他者同士の関りを観察、班と班を比べるなど活動を深めることができると考えられる。

2つ目は記録を利用する方法である。保育の領域でイタリアの教育法「レジジョエミリア」は有名であるが、ここで使われる記録方法がドキュメンテーションと呼ばれるものである。可能なら、協力家族に継続的な関りを依頼し、ふれあい体験の後、乳幼児の姿を継続的に記録させてもらう。それを自分の記録ノートに記録し、表示できる形にまとめる。それをよく見える場所に展示してシェアする機会を作る。保護者にも見てもらう。ドキュメンテーションの手法を身につけることはその後の保育の場でも非常に役に立つと考えられる。

この体験を「活動」だけに終わらせず、学生自身が主体的に取り組める活動に高めていきたい。

参考文献

- 1) 佐伯胖, 刑部育子, 荻宿俊文: ビデオによるリフレクション入門, (2018), 東京大学出版会
(文責: 田頭 伸子)